

「スポーツ」と「地球環境問題」の位置づけに関する研究

一子ども・青少年へのスポーツを通じた地球環境問題の啓発と

新たな取り組みについて一

大津 克哉*

抄録

1980年代に入って、環境問題への関心が高まり、経済成長のみを重視するのではなく、「環境保全」と「経済発展」を両立させた新しい方式として「持続可能な開発」が提案された。持続可能な開発の概念に従って、地球規模の行動計画である「アジェンダ 21」が採択されたリオデジャネイロでの地球サミットから20年以上経つものの、残念ながら目標達成どころか世界規模の環境問題は悪化してきた。質より量の方に大きな強調がおかれた近代社会の発展によって環境破壊が誘発されたように、より大きく成長と発展を続けていこうとする近代社会の「もっともっと・・・」の強迫観念は、スポーツ界でも同様に感じられるようになった。

例えば、オリンピック競技大会に象徴されるように、スポーツイベントの巨大化に伴い、イベント自体が及ぼす自然環境への影響を無視できなくなってきた。そのため、自然の保全・環境保全に向けた取り組みはもはやスポーツ界も例外ではなく、イベントを主催する競技団体の社会的責任(Corporate Social Responsibility: CSR)として、環境問題に対して最大限の取り組みが求められるようになった。同様に、スポーツ用品メーカー等のスポーツ関連業界もしかり、CSRを全うしていこうという動向が現在確実のものとなっている。

さらに、新たに公布された新学習指導要領において、保健体育科の体育編「体育理論」では、新たに「スポーツと環境問題」のテーマが取り扱われることになった。これは、スポーツを行うことによって及ぼされる環境への影響を考え、持続可能な社会の実現に向けた責任ある行動を考えさせる意図があり、スポーツを通じた環境教育の一面として期待される。

このようにスポーツをひとつのツールとして、環境問題などの差し迫った課題に対し積極的に取り組んでいくことは、スポーツ界だけの変革に止まらず、持続可能な社会を実現させることにも繋がり、これからのスポーツ界で注目されるモデルケースとなりうる。

キーワード：

スポーツ， 地球環境， 持続可能性， スポーツ競技団体の社会的責任

* 東海大学 〒259-1292 神奈川県平塚市北金目 4-1-1

Study about the relationship between "Sport" and "Global Environment Issues":

Future initiatives to increase awareness of global environment issues among children and youth through sport

Katsuya OTSU*

Abstract

Without morals or a sense of ethics, sport might cause negative impacts on our health and global environment. Educational activities will be a focal point when considering what kind of positive sport and physical education activities are important for the health of the environment and the earth. Utilizing sport and physical education as a tool for solving environmental issues would contribute to change the world of sport and actualize a sustainable society. It would also draw attention as a model case in sport world.

The results of this research showed:

1. A fundamental cause of environmental problems is the fact that we don't apply the morality we learned from our parents, the wisdom we inherited from tradition and the knowledge we acquired in school once we enter our economically driven society. Education on sustainability is about narrowing this gap.
2. The relationship with the environment becomes an issue as 21st century is called "The century of the environment". The impact of environmental problems on sport is considerable but within the sport sphere in Japan there has been little research done on "sport and the environment".
3. As Olympic and other sport events grow, their impacts on the environment cannot be ignored. Accordingly, sport associations must maximize their efforts to address environmental issues as part of their CSR activities. Other sport related organizations such as sporting goods manufacturers should also take actions.
4. Sportsmanship or fair play is to respect rules, behave fairly and build trust between people. We are addressing a similar situation between human and environment. This relationship is referred to as "Ecoplay"—enriching nature and reducing energy and material consumption as a natural part of sportsmanship. By calling on sports enthusiasts to adhere to the principles of Ecoplay in their work and everyday activities, we can alter our actions towards the development of a sustainable society.

Key Words :

Sport, Global Environment, Sustainability, Corporate Social Responsibility (CSR)

* Tokai University 〒259-1242 4-1-1 Kitakaname Hiratsuka-city, Kanagawa JAPAN

1. はじめに

1980年代に入って、環境問題への関心が高まり、経済成長のみを重視するのではなく、「環境保全」と「経済発展」を両立させた新しい方式として「持続可能な開発」¹⁾が提案された。持続可能な開発の概念に従って、国連を中心とした国際機関は1992年にブラジル・リオデジャネイロで開かれた地球サミットにおいて、環境を破壊しない開発を行うことを原則とするリオ宣言とともに、地球規模の行動計画である「アジェンダ21」を採択した。しかし、リオでのサミットから20年以上経つものの、残念ながら目標達成どころか全体的には、地球温暖化や大気汚染、海洋汚染、オゾン層の破壊、酸性雨、地球規模の砂漠化、有害廃棄物の越境移動、気候変動による生物多様性の減少や種の絶滅、乱伐、水不足にいたるまで、世界規模の環境問題は悪化してきた。

さらに、天然資源はかつてない速さで消え去りつつある。依然、持続不可能な実践によって汚染が生じ、地域の生態系だけでなく地球環境にとっても脅威となっている。質より量の方に大きな強調がおかれた近代社会の発展によって環境破壊が誘発されたように、より大きく成長と発展を続けていこうとする近代社会の「もっともっと・・・」の強迫観念は、スポーツ界でも同様に感じられるようになった。

例えば、オリンピック競技大会に象徴されるように、スポーツイベントの巨大化に伴い、イベント自体が及ぼす自然環境への影響を無視できなくなってきた。そのため、自然の保全・環境保全に向けた取り組みはもはやスポーツ界も例外ではなく、イベントを主催する競技団体の社会的責任(Corporate Social Responsibility: CSR)として、環境問題に対して最大限の取り組みが求められるようになった。同様に、スポーツ用品メーカー等のスポーツ関連業界もしく、CSRを全うしていこうという動向が現在確実のものとなっている。

このように自然の保全、環境保全の義務はスポーツ界も同様である。スポーツ愛好家をはじめ、スポーツ競技団体や関連業界の社会的責任として「スポーツの現場における環境保全」はもちろんのこと「スポーツを通じた環境問題の啓発」の両軸を推進していけば、スポーツは地球環境問題を解決する一翼を担う事も可能となる。地球環境を守ることの大切さを発信する試みは、スポーツと環境の関わり方を改めて考える機会を得ることができ、スポーツや体育の研究分野においても大変意義のあることである。

2. 目的

近年、スポーツ界でも徐々に見られるようになったエコ活動の実践や啓発であるが、地球環境の悪化は、スポーツの存在自体に関わる重要な問題であるにもかかわらず、日本のスポーツ研究の分野において「スポーツと地球環境」の問題に関する研究がこれまでほとんど為されていない。

本研究では、環境倫理の観点からのアプローチも加えられるが、これは、環境に関する教育内容の充実に関しての基礎的理論と成り得るものであり、学校教育だけにとどまらずスポーツ界で取り込まれる環境プログラムの構築に多くの示唆を与えるという点において意義を有する。

そこで、「環境の持続可能性の確保」という点に着目し、環境保全に向けた各種の取り組みや、環境教育、啓発の中で効果的な手段として用いられているスポーツが、昨今、問題となっている地球環境問題に対してどのような社会的貢献を果たすのかを明らかにする。

3. 方法 (仮説を含む)

スポーツ競技団体の中でもいち早く環境問題に対してアクションを起こした国際オリンピック委員会 (IOC) の活動について取り上げる。IOCのオリンピック研究センター (OSC) で管理されているデータベースや各オリンピック競技大会組織委員会が発行する招致ファイル等の文献調査をはじめ、2002年にIOCがOlympic Games Study Commission (OGSC) を設立し、大会の規模やコストの削減、運営の簡素化を図ることを提言するOlympic Games Impact (OGI) 研究で示されているオリンピック競技大会における持続可能な発展についての観点(経済、社会・文化的な側面、環境)から、1つの重要なファクターとして「環境問題」が取り扱われることに至ったIOCの環境問題に対する取り組みの経緯とその社会的な背景、そしてオリンピック競技大会開催都市における実際の効果と問題点について検証する。

そこで、各種スポーツ競技団体や国連の中でも環境部門を専門に扱う国連環境計画 (UNEP) の環境報告書を文献研究の対象にするだけではなく、定期的に行われているスポーツ大会や環境関連会議においてどのような環境保全活動が取り込まれ、生起しているかを調査する。

4. 結果及び考察

本来スポーツは、人間の健康にとって処方さえ誤らなければよいものであった。しかし、現在、スポーツと地球環境の関係は、ネガティブな関係が支配的で、スポーツ活動によって自然環境を壊してしまう恐れもあり、また、悪化した環境はスポーツ参加者の健康を害するものにもつながる。D. チェルナシエンコは、「もはやスポーツは、ある種の倫理観やモラルがなければ、参加者の健康や地球環境に対して悪影響を及ぼす」²⁾と述べるように、今日行なわれているスポーツは地球環境に対して持続可能なものではないことを指摘している。

4-1 環境倫理の観点からのアプローチ

環境倫理は、人間の諸活動による人間中心主義的、功利主義的な自然観から自然環境を破壊することに対して、「自然との共生」、「自然環境の保全の必要性」を倫理面から根拠づけようとするものであり、1960年以降からアメリカを中心とした自然保護運動から展開されたものである。この自然保護運動は、R. カーソンの著書『沈黙の春』³⁾ (1962) から始まったとよい。また、R. ナッシュは『自然の権利』の中で、倫理について、人間（あるいは、人間の神々）の専有物であるという考えから転換し、むしろ、その関心対象を動物、植物、岩石、さらには、一般的な“自然”、あるいは、“環境”にまで拡大すべきであると述べ、さらに、「自然の解放」「生命の解放」「地球の権利」のみならず“太陽系・宇宙の権利”を人間妨害から解放するために防衛すべきだともいう⁴⁾。この流れから、「環境」や「エコロジー」という言葉が身近になっていき、市民運動がアメリカ政府の野生生物に対する考え方をすっかり変えさせ、保護制度等の制度改革運動に進展した。

これまでは自然を人間にとって都合のよい状態に創り変えていくことに価値が置かれてきた。確かに近代スポーツは、自然の場所から離れ、開発された自然環境で行われる屋外スポーツや、建造された屋内環境で行われるスポーツなど、快適さやシーズンの消失、さらに施設や様々な条件の均一性を求めて変容していった。まさに、自然からの影響を克服していくことで近代スポーツは成立してきたのである。しかし、「環境倫理」の観点からすると、拡大や前進といったこれまでの価値観に異議が唱えられ、人間中心の価値観から脱却する必要性が求められてくる。

4-2 環境倫理的視点から考えるスポーツ活動

現在、スポーツ・レジャー活動において、これま

での自然的環境から人為的環境へ、そして人工的環境へと向かった流れがここに来て、人工芝から天然芝への移行やナイトゲームからデイゲームへの変更、人工施設型レクリエーションから自然型レクリエーションへの参加、というような「自然への回帰」ともとれる逆の流れにシフトしつつある。この、「自然」との距離の取り方を検討すべく、できる限り自然の中でスポーツを行う事へ焦点が徐々に移ってきている傾向が見受けられる。

今回の東日本で発生した未曾有の大震災を受け、改めて地球環境問題に対する対応が叫ばれているが、今後の復興に関しては、このような「環境倫理」の視点をベースにした、活動場所の復興が求められるであろう。

4-3 体育理論で扱われる「スポーツと環境」

上記で述べた環境倫理の視座は、環境教育の内容に関する基礎的理論と成り得る。文部科学省は、学習指導要領改訂に伴い各教科等を通じて環境教育・学習を推進するために、環境問題に関する内容を充実し、体験的な学習の機会を通じて、環境に対する豊かな感受性と熱意、見識を持つ「人づくり」に取り組んでいる。今回改訂された新学習指導要領のポイントとして、保健体育科では実技だけではなく体育理論の改善も目立ち、知識の習得を重視していることから、体育編の「体育理論」において「スポーツと環境」が取り扱われることになった。これは、スポーツを行うことによって及ぼされる環境への影響を考え、持続可能な社会の実現に向けた責任ある行動を考えさせる意図がある⁵⁾。

とりわけ、新たに公布された新学習指導要領で新たに「スポーツと環境問題」のテーマが取り扱われることになったことは、スポーツを行うことによって及ぼされる環境への影響を考え、持続可能な社会の実現に向けた責任ある行動を考えさせる意図があり、スポーツを通じた環境教育の一面として期待される。

4-4 IOCの環境問題に対する取り組み

1) 経緯と社会的な背景

IOCが率先して地球環境問題に取り組んでいくムーブメントが起こり始めたのは実に1990年代に入ってからである。IOCは、1990年代初頭から「スポーツ」、「文化」に続いて「環境」をオリンピズムの3本柱とし、スポーツ競技団体のCSRとして地球環境への最大限の配慮のもとでオリンピック競技大会を行うことを公表した。そして、1995年に専門委員会である「スポーツと環境委員会」を設置し、2年に一度世界会議を開催している。この世界会議で

は、スポーツと環境の接点についての説明や、環境への取り組みを促すための実践的な行動を要請するスピーチなど、各国のオリンピック委員会（NOC）をはじめ、国際競技団体（IF）、国連機関、NGO/NPOなどの代表者が一堂に会し、情報の共有を行っている。しかし、オリンピック大会組織委員会による開催に向けた発表が多くを占め、むしろすでにイベントを終えた関係者が大会前から大会中、大会後を通じて一体どのようなレガシー（遺産）が残せたのか、これからイベントを控える側に情報を発信、共有していく必要性が今後の課題となっている。

IOCは、1996年にオリンピズムの根本原則、規則、付属細則を成文化した『オリンピック憲章』に初めて環境に関する項目「持続可能な開発」を加えた。さらに、1992年にリオデジャネイロで開催された地球サミットでの採択文書「持続可能な開発のための人類の行動計画（アジェンダ21）」と連動する形で、1999年にIOCは独自の行動指針として、スポーツ界の環境保全の基礎概念と実践活動を規定した「オリンピックムーブメント・アジェンダ21」を採択した⁶⁾。

オリンピックにおける環境保全活動は1992年のバルセロナ大会からスタートし、その後も各大会組織委員会に引き継がれていった。現在では、OGSCが外部の研究機関と共同して、OGI研究を推進している。オリンピック競技大会の持続可能性を高めるために、オリンピック大会開催決定の2年前から、大会まで準備期間の7年間、そして大会後の3年間、合計12年間という長期でみた開催都市への社会的な影響、スポーツへの影響、オリンピック教育の価値といった、単に経済的な内容ばかりではなく、いかに有形や無形のレガシーを開催都市が残したのかといった様々な視点から、長所だけではなくマイナス面も含めた評価を行うようになった。開催された地域の持続可能性が高まったのか、または低下したのかということの数値目標を定めて、開催前よりもその度合いが高まったことが測定できるのであればオリンピックのようなメガイベント開催も評価されることになるだろう。これは、持続可能なイベントにするためにはどうすべきかという具体例を世界中に示すチャンスであり、競技大会に関わるすべての人に対して環境教育を行うこの上ない機会でもある。

例えば、東京は2020年の五輪誘致に向けて立候補申請のファイルをIOCに提出したが、誘致の成功、失敗にかかわらず、他のあらゆる大会の反省点を分析し、しっかりと踏まえた上で、打ち上げ花火的なイベントではなく、長期間にわたり財産として残るインフラ整備に代表される有形なレガシーと、特に

文化や教育など無形のレガシーとして具体的にどのようなものがあるのかという計画を東京から日本、そしてアジア、世界に向けて発信してもらうことを期待したい。

2) IOCが取り組む新たな青少年への環境教育

地球環境問題改善に向けたIOCの啓発活動で今後注目されるのは、青少年への教育の側面である。IOCが新たに創設した14歳～18歳までの若い世代を対象とするユースオリンピック競技大会（Youth Olympic Games：YOG）が、2010年8月にシンガポールで夏季大会、2012年1月にインスブルックで冬季大会が開催された。

この、IOCの新たな試みとしてスタートしたYOGの注目すべき点は、競技だけのスポーツイベントではなく、文化・教育プログラム（Culture and Education Program：CEP）が導入された点であろう。選手たちは基本的に大会の開幕から閉幕まで選手村に滞在し、競技以外にCEPへ参加するよう求められる。選手に各種のCEPへ参加、体験させることで、国際的な文化交流を通して人間形成を促すというように、勝敗よりも選手への教育や交流に重きを置いているのが伝わる。YOGの特色の1つでもある参加者がオリンピックの価値に対する知識を深めると同時に、学んだ価値を実生活に生かしていく方法についても考察できるように企画された各種CEPの中には、環境問題について学べる体験型のワークショップが夏・冬季の両大会で展開されていた。これらのプログラムによって、YOGアスリート達がスポーツをきっかけとして地球環境に関する認識を深めることが期待される。

5. まとめ 環境とスポーツの新たな関係

今やスポーツ界において、環境との調和や共生などが求められているように、環境保護に果たす役割について考えるようになった。スポーツが積極的に環境問題にコミットする責任があり、さらなるスポーツのグリーン化を目指すことが重要になってくる。チェルナシェンコによると、グリーンとは環境への影響がその時点で最小にとどめられている場合をいい、スポーツのグリーン化を目指すには、以下のような目標をあげている⁷⁾。

- 基本的なグリーンゲーム倫理を採用し広めること。
- 「持続可能なスポーツ」の目標を理解し、それに向かって進むこと。
- スポーツをより持続可能となるように導く原則を定めること。

- ▶ すべてのレベルで私たちのゲームをグリーン化する助けとなる「道具」を使用すること。

以上を踏まえて、ある種の倫理観やモラルがなければ、参加者の健康や地球環境に対して悪影響を及ぼすと説明している。

つまり、「地球環境」と「スポーツ」の関係において鍵となるものはやはり、「持続可能性」である。スポーツが健康な未来を守るために、グリーンスポーツの大切さを再認識しなくてはならない。これからのスポーツ開発がどのようなものであれ、環境へのダメージを最小限(ミニマム・インパクト)にし、環境の認識が最優先されなければならない。そしてさらに、現在の廃棄型から持続可能型のスポーツへの転換が必要である。しかし、未だスポーツ界は、「環境」を保つためにせめてミニマム・インパクトを心掛けるということにとどまっている。

環境の持続可能性の確保に向けた行動は、スポーツ競技団体や関連業界だけの取り組みに止まらず、スポーツに関与するすべての人々が水や空気を浄化する自然を守り、資源枯渇と環境汚染を防ぐために省エネ・省資源を実践していくことは、スポーツ愛好家としての社会的責任である。

本来、アスリートやスポーツ愛好家など、スポーツ参加者こそ地球環境問題には敏感である。なぜならスポーツ参加者は、プレイする環境として「きれいな空気」や「きれいな水」を求める。すなわち地球環境の大切さを認識しているのである。それにもかかわらず、自然環境の状態が健康やパフォーマンスの鍵を握る要素であるという認識について、実際にスポーツを行っていても地球環境の変化による影響が自分の身に降りかかってくる問題として身近なものとして理解し難い。

しかし、「環境の持続可能性の確保 Sustainable development」の点からスポーツの役割を鑑みると、スポーツを含め人間の諸活動は、基本的に自然破壊や環境汚染を伴うものであるため、スポーツ界のCSRとして「スポーツの現場における環境保全」が必要であるし、スポーツ愛好家と呼ばれる人々は世界中に数多くおり、社会的影響力を持っていることから、「スポーツを通じた環境問題の啓発」が求められる。

例えば、「スポーツの現場における環境保全」においては、アスリートがロールモデルとして環境メッセージの発信を行うことや、オリンピック競技大会に代表されるように、開催都市の再開発等に伴って環境負荷を低減させるだけでなく、むしろ環境を整備、改善し、都市の緑地化を計画に入れて、開催前よりもレガシーとしてその地域の持続可能性が

高まったのかという指標を元にしたエコ活動の実践、そしてスポーツ施設や用品メーカーなどの業界におけるエコ活動の推進が急務となる。

一方、「スポーツを通じた環境問題の啓発」については、今後、学校教育の場面でも行われる事になる。学習指導要領改訂の方向性として、保健体育科の体育編「体育理論」では、新たに「スポーツと環境問題」が取り扱われることになった。高等学校学習指導要領で、「スポーツを行う際は、スポーツが環境にもたらす影響を考慮し、持続可能な社会の実現に寄与する責任ある行動が求められること⁸⁾。」とあるように、今、私たちに問われているのは、「人類と地球」との関わり方である。「スポーツと環境」にとどまらず、もはや「スポーツと持続可能性」について問われている。スポーツは確かに、すべての国々のあらゆる人びとや民族に開かれた、すばらしい共通の「地球文化」なのである。「地球の健康」のためにもせめてグリーンな活動を心がけなくてはならない。まずは、自分たちが地球に与える広範な影響を意識しながら、自らの行動が環境をどのように左右しているのかを知ること、そしてそれら及ぼされている影響を未然に防げる行動を取ることが大切なのではなからうか。早急にスポーツによる環境破壊と、環境によるスポーツ破壊を防ぐために各々が責任ある解決策を見出す必要がある。

とかく、わが国の子ども・青少年へのスポーツ振興を促進する上で、新たに求められるスポーツを通じた地球環境問題の啓発と実践活動については、今後さらにYOGで展開されているモデルプログラムを参考にし、領域において果たす役割について研究を継続していく必要がある。

参考文献

- 1) 持続可能の概念は、1986年国連(環境と開発に関する世界委員会)の報告に示されたのが始まりである。将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、地球にこれ以上の害を与えず自然環境を保護しながら、今日の世代のニーズを満たすような新しい開発の必要性を強調した。大来佐武郎(1987)『地球の未来を守るために』、環境と開発に関する世界委員会, pp. 66-70.
- 2) D. チェルナシエンコ著, 小椋博, 松村和則編訳(1999) オリンピックは変わるか, 道和書院, p. 132
- 3) 農薬や殺虫剤に含まれる有毒化学物質が自然の仕組みを狂わせ、その鋒先はほかならぬ私たち人間の住む地球そのものに向けられていると警告し、ついには人体を蝕んでいくという有り様を豊富な事例で示し、世界に衝撃を与えた。
- 4) R. ナッシュ, 松野弘訳(1999) 自然の権利, 筑摩書房, pp. 30-34.
- 5) 文部科学省(2009) 高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編, 東山書房, pp. 99-101.

- 6) International Olympic Committee Sport and Environment Commission
(2000) OLYMPIC MOVEMENT'S AGENDA21 Sport for sustainable
development, Shell International
- 7) D. チェルナシエンコ著, 小椋博, 松村和則編訳 (1999) 前掲書, p. 132.
- 8) 文部科学省 (2009) 高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育
編, 東山書房, pp. 99-101.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。

